

『トリックス・アンド・ヴィジョンからもの派へ』展



飯田昭二《Half & Half（ピンポン玉）》（1968）鳥かご、ピンポン玉、鏡、50x50x51.5cm

展覧会タイトル トリックス・アンド・ヴィジョンからもの派へ

出品作品（予定） 飯田昭二、鈴木慶則、高松次郎、堀内正和、榎倉康二、小清水漸、
菅木志雄、関根伸夫、成田克彦

会期 2013年3月9日（土） - 4月6日（土）

会場 東京画廊+BTAP | 東京
〒104-0061 東京都中央区銀座 8-10-5 第4 秀和ビル 7 階
TEL: 03-3571-1808 / FAX: 03-3571-7689

開廊時間 (火—金)11:00-19:00 (土)11:00-17:00
閉廊日 日、月、祝

トークイベント 「その時、現代美術が動いた」
ゲスト：峯村敏明（美術評論家）
2013年3月9日（土） | 15:00-

オープニング・レセプション
2013年3月9日（土） | 16:00-18:00
東京画廊+BTAP にて

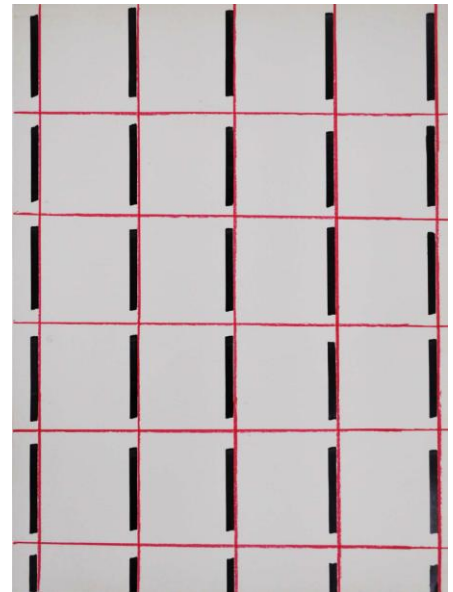
お問い合わせ 佐々木博之（hiroyuki.sasaki@tokyo-gallery.com）

この度、東京画廊+BTAP では 3 月 9 日（土）より『トリックス・アンド・ヴィジョンからもの派へ』展を開催いたします。

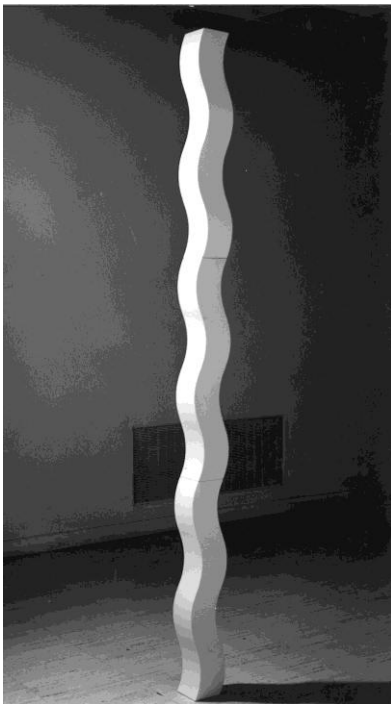
『トリックス・アンド・ヴィジョン』展（1968 年）は、中原佑介と石子順造の企画によって東京画廊と村松画廊で開催されました。同展は、視覚（Vision）の中に潜在するだまし（Tricks）をテーマに据え、「見る」ことの実態を明らかにしようと試みたものです。もの派につながる日本現代美術の潮流を形成していったという点で、2000 年代以降注目され高く評価されている展覧会です。

このたび東京画廊+BTAP は、当時出品された飯田昭二の《Half & Half（ピンポン玉）》（1968）を始め、鈴木慶則の《裏がえしの相貌をした非在のタブロー》（1967）、高松次郎の《波の柱》（1968）など、もの派の前史を証言する作品、さらにもの派初期の作品である関根伸夫の《位相ースポンジ》（1968）、菅木志雄の 1975 年のドローイング作品等を展示いたします。

皆様のご来場を心よりお待ちしております。



菅木志雄《無題》（1975）
マジックペン、パステル、紙、71x52.3cm



高松次郎《波の柱》（1968）
木、ラッカー、192.3 x 9 x 9 cm

日本は戦後の復興から 25 年で先進国に追いつく産業化社会を実現させました。この社会状況は、表現の世界に多大な影響を残します。

新しい表現の実験が盛んに行われた 1960 年代後半には「もの派」と呼ばれる作品群が現れます。この「もの派」が生まれる契機となった展覧会が『トリックス・アンド・ヴィジョン』です。この展覧会には革新的な点がありました。それまではアーティストが「つくること」を前提とした展覧会ばかりでしたが、「見ること」をテーマに企画されていたのです。

産業化社会は「つくること」に重点がおかれていますが、1970 年代から始まる情報化社会では「見ること」に重点が移行し、消費者となる見る立場を意識した広告が大きな役割を得ることになります。

この展覧会には、もの派の主要な作家として活躍することになる李禹煥は参加していません。しかし、李はこの展覧会がもの派につながる重要な出来事であったと私に話したことがありました。李は「つくる」立場ではなく「見る」立場から「見ること」を考えたのではなかったのでしょうか。関根伸夫《位相一大地》（1968 年）とともに、李の論文『事物から存在へ』（1969 年）は、もの派と呼ばれる作品群を生み出す重大な契機となりました。「見ること」が言説を生み、言説が「つくる」ことへと還流して、もの派の活動は発展していきます。

欧米では現在日本の美術を歴史的に捉え直そうとする機運が高まっています。美術の歴史化は言説によってなされるのであり、日本の戦後美術の言説化が「見ること」の発見を通してなされたことを考えれば、もの派の活動に焦点が当てられることは必然と言えます。

東京画廊+BTAP ディレクター 山本豊津